

# 応用数学

2021 年 11 月 19 日

## 1 線形代数

### 1.1 スカラー、ベクトル、行列

線形代数ではいくつかの数学的な対象を扱う。

- スカラー  
スカラーは単純な数字
- ベクトル  
ベクトルは数字の配列で次のように表現される:

$$\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}$$

- 行列  
行列は数字の 2 次元の配列で次のように表現される:

$$\mathbf{A} = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$$

行列の操作は以下の通り:

– 和

$$\mathbf{C} = \mathbf{A} + \mathbf{B} \rightarrow C_{i,j} = A_{i,j} + B_{i,j}$$

– 積

$$\mathbf{C} = \mathbf{AB} \rightarrow C_{i,j} = {}_k A_{i,k} \times B_{k,j})]$$

– 要素積 (アダマール積)

同じインデックスの要素同士を掛けわせる。 $\mathbf{A} \otimes \mathbf{B}$  と表記する:

$$\mathbf{C} = \mathbf{A} \otimes \mathbf{B} \rightarrow C_{i,j} = A_{i,j} \times B_{i,j}$$

### 1.2 逆行列

#### 1.2.1 行列基本変形

- ある行を定数倍する

- ある行に別の行の定数倍を加える
- ある行と別の行を入れ替える

行列  $\begin{pmatrix} 1 & 4 \\ 2 & 6 \end{pmatrix}$  の逆行列は行基本変形の組み合わせで求められる：

$$\left( \begin{array}{cc|cc} 1 & 4 & 1 & 0 \\ 2 & 6 & 0 & 1 \end{array} \right) \rightarrow 2\text{行目に } 1/2 \text{ を掛ける} \rightarrow \left( \begin{array}{cc|cc} 1 & 4 & 1 & 0 \\ 1 & 3 & 0 & \frac{1}{2} \end{array} \right)$$

$$\rightarrow 1\text{行目に } 2\text{行目} \times -1 \text{ を加える} \rightarrow \left( \begin{array}{cc|cc} 0 & 1 & 1 & -\frac{1}{2} \\ 1 & 3 & 0 & \frac{1}{2} \end{array} \right)$$

$$\rightarrow 2\text{行目に } 1\text{行目} \times -3 \text{ を加える} \rightarrow \left( \begin{array}{cc|cc} 0 & 1 & 1 & -\frac{1}{2} \\ 1 & 0 & -3 & 2 \end{array} \right)$$

$$\rightarrow 1\text{行目と } 2\text{行目を入れ替える} \rightarrow \left( \begin{array}{cc|cc} 1 & 0 & -3 & 2 \\ 0 & 1 & 1 & -\frac{1}{2} \end{array} \right)$$

逆行列は  $\begin{pmatrix} -3 & 2 \\ 1 & -\frac{1}{2} \end{pmatrix}$  となる。この逆行列の求め方をガウスの掃き出し法という。

## 1.3 行列式

ある行列が 2 つのベクトルの組み合わせだと考えてみる

$$\begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \vec{v}_1 \\ \vec{v}_2 \end{pmatrix}$$

$\vec{v}_1$  と  $\vec{v}_2$  からなる平行四辺形の面積  $\begin{vmatrix} a & b \\ c & d \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} \vec{v}_1 \\ \vec{v}_2 \end{vmatrix}$  を行列式といふ。行列式が 0 のとき、逆行列は存在しない。

### 1.3.1 行列式の性質

- 同じベクトルを複数持つとき、行列式は 0

$$\begin{vmatrix} \vec{v}_1 \\ \vdots \\ \vec{w} \\ \vec{w} \\ \vdots \\ \vec{v}_2 \end{vmatrix} = 0$$

- 1 つのベクトルが定数倍されると、行列式も定数倍

$$\begin{vmatrix} \vec{v}_1 \\ \vdots \\ \lambda \vec{v}_l \\ \vdots \\ \vec{v}_2 \end{vmatrix} = \lambda \begin{vmatrix} \vec{v}_1 \\ \vdots \\ \vec{v}_l \\ \vdots \\ \vec{v}_2 \end{vmatrix}$$

- 1 つのベクトルだけ違うとき、行列式は足し合わせ

$$\begin{vmatrix} \vec{v}_1 \\ \vdots \\ \vec{v}_l + \vec{w} \\ \vdots \\ \vec{v}_2 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} \vec{v}_1 \\ \vdots \\ \vec{v}_l \\ \vdots \\ \vec{v}_2 \end{vmatrix} + \begin{vmatrix} \vec{v}_1 \\ \vdots \\ \vec{w} \\ \vdots \\ \vec{v}_2 \end{vmatrix}$$

- 行を入れ替えると符号が変わる

$$\begin{vmatrix} \vec{v}_1 \\ \vdots \\ \vec{v}_s \\ \vec{v}_t \\ \vdots \\ \vec{v}_2 \end{vmatrix} = - \begin{vmatrix} \vec{v}_1 \\ \vdots \\ \vec{v}_t \\ \vec{v}_s \\ \vdots \\ \vec{v}_2 \end{vmatrix}$$

## 1.4 固有値と固有ベクトル

$A\vec{v} = \lambda\vec{v}$  となる  $\lambda$ を固有値、 $\vec{v}$ を固有ベクトルという。固有値は  $|A - \lambda I| = 0$  の解。

## 1.5 固有値分解

ある行列を、固有値を対角成分とする行列と、固有ベクトルからなる行列で表現することを固有値分解という。

$$\Lambda = \begin{pmatrix} \lambda_1 & & & \\ & \lambda_2 & & 0 \\ & & \ddots & \\ 0 & & & \end{pmatrix}, V = (\vec{v}_1 \dots), AV = V\Lambda \Rightarrow A = V\Lambda V^{-1}$$

## 1.6 特異値分解

正方行列以外は固有値分解と似たようなことができる

$$M\vec{v} = \sigma\vec{v}$$

$$M^T\vec{u} = \sigma\vec{u}$$

このような特殊な単位ベクトルが存在すれば、次のように特異値分解できる

$$M = USV^{-1}$$

## 1.7 特異値の求め方

$$MV = US \Rightarrow M = USV^{-1}$$

$$M^T V = VS^T \Rightarrow M^T = VSU^{-1}$$

これらの関係から以下が成り立つ

$$MM^T = USV^{-1}VS^T u^{-1} = USS^T U^{-1}$$

この  $MM^T$  を固有値分解すればよい。

## 2 確率・統計

### 2.1 確率

頻度確率(客観確率) 発生する頻度

ベイズ確率(主観確率) 信念の度合い

### 2.2 条件付き確率

$X = x$  が与えられたとき、 $Y = y$  となる確率

$$P(Y = y|X = x) = \frac{P(Y = y, X = x)}{P(X = x)}$$

### 2.3 ベイズ則

$$P(X = x|Y = y)P(Y = y) = P(Y = y|X = x)P(X = x)$$

### 2.4 確率変数と確率分布

確率変数 事象と結び付けられた数値

確率分布 事象の発生する確率の分布

### 2.5 期待値

ある分布における確率変数の平均値、「あり得そうな」値

$$E(f) = \begin{cases} \sum_{k=1}^n P(X = x_k)f(X = x_k) & (\text{離散確率変数}) \\ \int_{-\infty}^{\infty} P(X = x)f(X = x)dx & (\text{連続確率変数}) \end{cases}$$

### 2.6 分散と共分散

分散 データの散らばり具合

$$Var(f) = E((f(X = x) - E(f))^2)$$

$$= E(f(X = x)^2) - E(f)^2$$

共分散 2つのデータ系列の傾向の違い

$$Cov(f, g) = E((f(X = x) - E(f))(g(Y = y) - E(g)))$$

$$= E(fg) - E(f)E(g)$$

$$\text{標準偏差 } \sigma = \sqrt{Var(f)}$$

## 2.7 確率分布

ベルヌーイ分布 コイントス

$$P(x|\mu) = \mu^x(1-\mu)^{1-x}$$

マルチヌーイ (カテゴリカル) 分布 サイコロ

$$P(x_1, x_2, \dots, x_k | \mu_1, \mu_2, \dots, \mu_k) = \frac{n!}{x_1!x_2!\dots x_k!} \mu_1^{x_1} \mu_2^{x_2} \cdots \mu_k^{x_k}$$

二項分布 ベルヌーイ試行の多試行版

$$P(x|\lambda, n) = \frac{n!}{x!(n-x)!} \lambda^x (1-\lambda)^{n-x}$$

ガウス分布 釣鐘型の連続分布

$$N(x, \mu, \sigma^2) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}\sigma^2} e^{-\frac{(x-\mu)^2}{2\sigma^2}}$$

## 2.8 記述統計と推測統計

推測統計 集団から一部を取り出し、元の集団 (母集団という) の性質を推測する

記述統計 集団の性質を要約し記述する

## 2.9 推定

母集団を特徴づける母数 (パラメータ) を統計学的に推測すること。

- 推定量  
パラメータ推定に使う計算方法や計算式のこと。推定関数ともいう
- 推定値  
計算した値

## 2.10 標本平均

標本の平均値

一致性 サンプル数が大きいほど母集団の値に近づく

不偏性 サンプル数がいくらであっても、その期待値は母集団と同様。  $E(\hat{\theta}) = \theta$

## 2.11 標本分散

一致性は満たすが、不偏性は満たさない

$$\hat{\sigma}^2 = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2$$

## 2.12 不偏分散

サンプル数が少ないときに不偏性を満たすように標本分散を修正

$$s^2 = \frac{n}{n-1} \hat{\sigma}^2$$

# 3 情報理論

## 3.1 自己情報量

$$I(x) = -\log(P(x)) = \log(W(x)) \quad (\text{底が } 2 \text{ のとき単位は } bit, e \text{ のとき } nat)$$

## 3.2 シャノンエントロピー

自己情報量の期待値

$$H(x) = E(I(x)) = -E(\log(P(x))) = -\sum P(x) \log(P(x))$$

## 3.3 カルバック・ライブラーダイバージェンス

同じ事象・確率変数における、異なる確率分布  $P, Q$  の違いを表す

$$\begin{aligned} D_{KL}(P||Q) &= E_{x \sim P} \left[ \log \left( \frac{P(x)}{Q(x)} \right) \right] \\ &= P(x) \frac{P(x)}{Q(x)} \\ &= P(x) \log(P(x)) - P(x) \log(Q(x)) \end{aligned}$$

## 3.4 交差エントロピー

KL ダイバージェンスの一部分を取り出したもの

$$\begin{aligned} H(P, Q) &= H(P) + D_{KL}(P||Q) \\ &= -E_{x \sim P} [\log Q(x)] \end{aligned}$$